高岡市埋蔵文化財調査概報第42冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報X

――― 平成10年度、中田地区の遺跡分布調査 ―――

1999年3月

高岡市教育委員会

例　言

1．本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。

2．当調査は、平成10年度の国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。

3．調査対象地は、高岡市中田地区である。

4．現地調査は、平成10年４月７日から同年11月13日までの実働21日である。

5．調査関係者は次のとおりである。

文化財課長：宮村勝博

［埋蔵文化財係］

主幹兼係長：石浦正雄

係員：山口辰一

係員：根津明義

係員：荒井　隆

係員：太田浩司

6．本書の作成において以下の各氏より御教示を得た。（順不同・敬称略）

小島俊彰、西井龍儀、宮田進一、山本正敏

7．本書の執筆は山口が担当した。

凡　例

遺跡、埋蔵文化財包蔵地

● 縄文時代遺物採集地点

▼ 弥生・古墳時代遺物採集地点

▲ 古代遺物採集地点

● 中世遺物採集地点

■ 近世遺物採集地点

調査参加者名簿

現地調査

京田直子、新谷晴紀子、杉村いく子、高田えみ子、田辺幸代、寺井久子
道谷美奈子、苗田朋江、幡薫、氷見智子、福澤雪、放生千絵、三島幸代

整理

高田えみ子、幡薫、放生千絵、三島幸代

目　　次

例　言
目　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　遺跡各説 …… 6

Ⅲ　遺　　物 …… 10

Ⅳ　結　　語 …… 11

挿　図　目　次

第１図　分布調査事業区分図（１／20万） …… 2
第２図　調査対象地区分図（１／10万） …… 3
第３図　中田地区位置図（１／５万） …… 4
第４図　かぞいろ塚遺跡、移田野塚遺跡位置図（１／5,000） …… 6
第５図　移田野塚遺跡地形測量図（１／200） …… 7
第６図　常国遺跡と石粟荘比定地（１／５万） …… 13

図　面　目　次

図面１　遺跡地図　中田地区全体図（１／２万５千）
図面２　遺跡地図　中田地区北側部分（１／１万５千）
図面３　遺跡地図　中田地区南側部分（１／１万５千）
図面４　遺物実測図　土器類（１／３）

図　版　目　次

図版１　遺跡　１．中田地区全景（西南西）
　　２．中田地区全景（北西）
図版２　遺跡　１．中田地区中央部全景（南西）
　　２．中田地区東側全景（南西）
図版３　遺跡　１．かぞいろ塚遺跡（南）
　　２．かぞいろ塚遺跡（南）
図版４　遺跡　１．移田野塚遺跡（南東）
　　２．移田野塚遺跡（東南東）
図版５　遺跡　１．移田野塚遺跡（西）
　　２．移田野塚遺跡（北）
図版６　遺跡　１．山下遺跡（北西）
　　２．山下遺跡（南東）
　　３．山下遺跡（南西）
図版７　遺跡　１．東保石坂遺跡（南西）
　　２．東保石坂遺跡（南東）
　　３．東保石坂遺跡（北東）
図版８　遺跡　１．常国遺跡（南東）
　　２．常国遺跡（南西）
図版９　遺跡　１．常国北遺跡（西）
　　２．常国北遺跡（北東）
　　３．常国北遺跡（南）
図版10　遺跡　１．滝遺跡（北）
　　２．滝遺跡（西）
　　３．滝遺跡（南南東）

Ⅰ 序　説

高岡市の位置

高岡市は富山県の北西寄りに位置する。北側は富山湾に臨む。東側は新湊市・大島町・大門町・小杉町と、南側は砺波市・福岡町と接する。また北側は、能登半島の基部東側を占める氷見市である。市域の大部分は庄川と小矢部川の２大水系によって形成された沖積平野である。これらは、庄川による沖積扇状地部分と、庄川と小矢部川による沖積低地部分とに大別される。砺波平野の北半部と射水平野の西端部に当たる。一方北西部には、西山丘陵と、これに続く二上丘陵が走っている。

西山丘陵埋蔵文化財分布調査

小矢部川左側一帯の西山・二上地域（西山丘陵・二上丘陵とその周辺の平野部）は、多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の所在地として知られていた。昭和50年代に入り開発工事や、開発計画が増大し、西山・二上地域での発掘調査が実施された。当地域に対する各種の開発行為が進むと共に、高岡市は、西山地区での総合開発を検討していた。このような状況の中で、当地域における遺跡の分布状況や内容の把握が、埋蔵文化財の保護上急務となってきた。以上のことから、高岡市教育委員会では、昭和58年～昭和62年度の５箇年に亘り国庫補助を得て「西山丘陵遺跡分布調査事業」を実施するに至った。その成果は各年度ごとに『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅴとして刊行している。

高岡市埋蔵文化財分布調査

高岡市は面積15,000haを計る。 この内約6,000haは、前述の通り西山丘陵分布調査として、分布調査が完了している地域である。平野部が主体を占める残りの地域でも、数々の遺跡が存在し、数々の開発工事がなされている。このため、西山丘陵地域に続いて、この地域でも国庫補助を得て、分布調査を実施することに至った。

広い地域であるので、３つの地域に大分した。市域の南部に当たる旧戸出町・旧中田町を１つの地域、そして残りの地域は昭和30年以前に合併した町・村よりなるので、これをＪＲ高岡駅付近を基準に南北に分け、旧市南部地域、旧市北部地域と称することにした。 それぞれの地域はすべて面積約3,000haを計るものである。そして「旧市南部地域」「旧市北部地域」「戸出・中田地域」の順で調査を実施することになった。

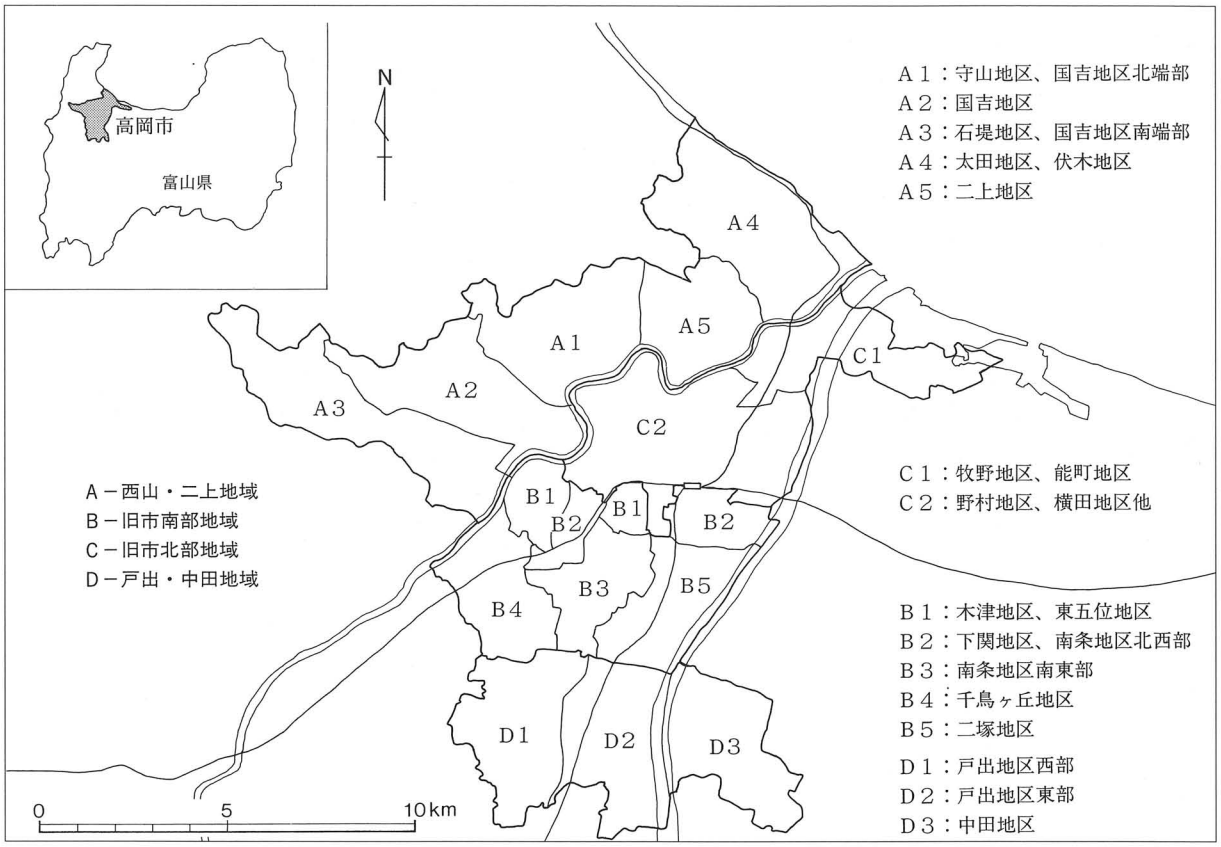
旧市南部地域の調査は、平成元年度～平成５年度に実施した。この成果は『高岡市埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅴとして報告している。旧市北部地域の調査は、平成６年度・平成７年度に実施した。この成果は『高岡市埋蔵文化財分布調査概報』Ⅵ・Ⅶとして報告している。

旧戸出町・旧中田町の「戸出・中田地域」については次のように３区に区分した。１．戸出地区西部：旧戸出町の内国道156号線より西側、２．戸出地区東部：同じく東側、３．中田地区：旧中田町全地域である。戸出地区西部・東部については平成８・９年度に調査を実施し、『高岡市埋蔵文化財分布調査概報』Ⅷ・Ⅸとして報告している。

今年度の分布調査

以上のような経緯で、本年度は「戸出・中田地域」の内、中田地区を対象として分布調査を実施することに至った。

今回の中田地区の分布調査事業によって高岡市域全体の分布調査が一応完了したことになる。期間は昭和58年度から平成10年度までの16年を要し、昭和63年度を除く15箇年の事業となった。



第１図　分布調査事業区分図（１／20万）

報告書一覧

分布調査事業の報告書は本書も含め以下のとおりである。

『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ』	1984年３月発行	守山地区、国吉地区北端部	昭和58年度事業
『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』	1985年３月発行	国吉地区	昭和59年度事業
『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』	1986年３月発行	石堤地区、国吉地区南端部	昭和60年度事業
『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ』	1987年３月発行	太田地区、伏木地区	昭和61年度事業
『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅴ』	1988年３月発行	二上地区	昭和62年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ』	1990年３月発行	木津地区、東五位地区	平成元年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』	1991年３月発行	下関地区、南条地区北西部	平成２年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』	1992年３月発行	南条地区南東部	平成３年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ』	1993年３月発行	千鳥ケ丘地区	平成４年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅴ』	1994年３月発行	二塚地区	平成５年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅵ』	1995年３月発行	牧野地区、能町地区	平成６年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅶ』	1996年３月発行	野村地区、横田地区他	平成７年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅷ』	1997年３月発行	戸出地区西部	平成８年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅸ』	1998年３月発行	戸出地区東部	平成９年度事業
『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅹ』	1999年３月発行	中田地区	平成10年度事業

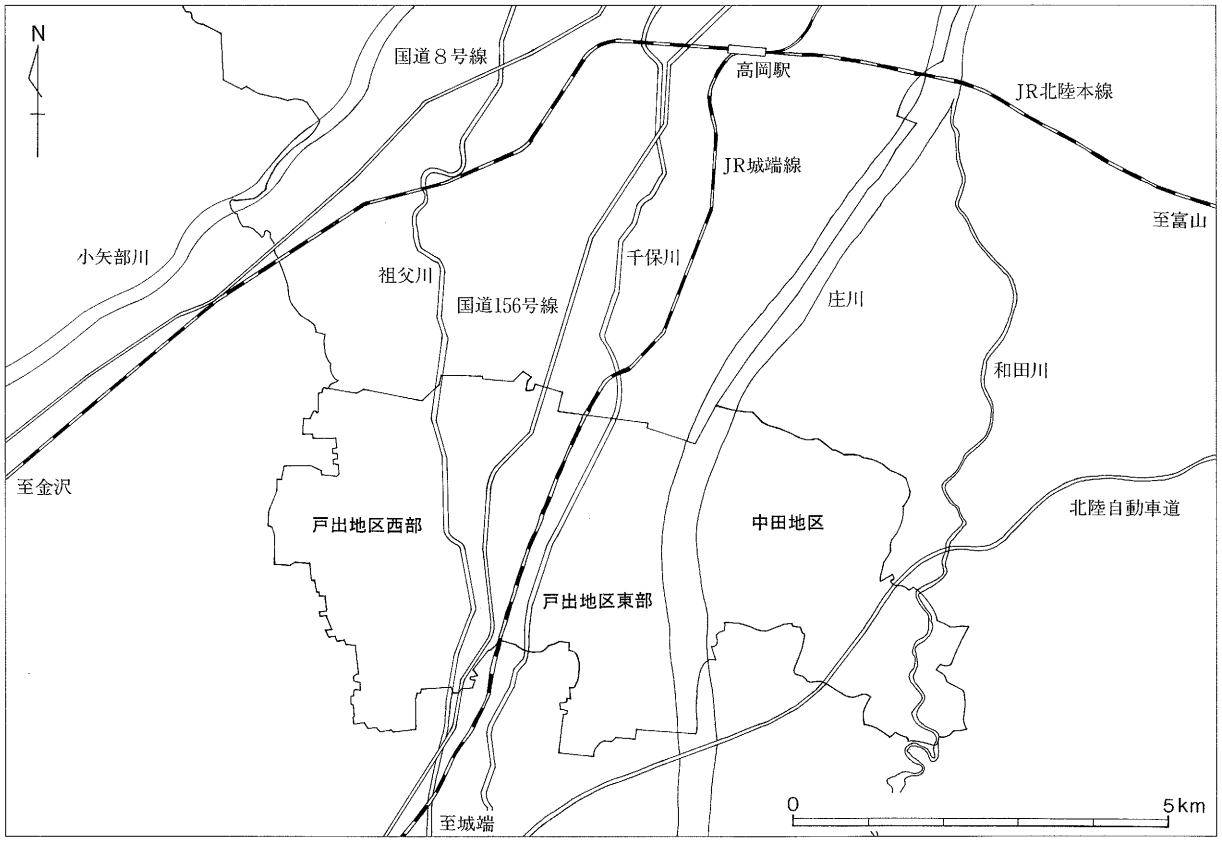
中田地区の概観

高岡市の中田地区（昭和29年に成立した中田町域）は、高岡市の南東部に位置する。北から東側は射水郡大門町・小杉町との行政界となり、南側は砺波市の庄東地区となる。西側は、庄川を隔て高岡市の戸出地区（昭和29年に成立した戸田町域）に至る。この中田地区は、北流して富山湾へ注ぐ庄川の右岸（東岸）で砺波平野の北東部に当たる。南北3.5km、東西2.9kmの拡がりである。

中田地区の東側は芹谷野段丘と金山丘陵からなり、この間は和田川による浸食谷となっている。西側は平野部であり標高15～30mを計る庄川扇状地の扇側部末端となっている。庄川は現在中田地区の西側を画する大河となっているが、これは天正13年（1585）の地震による影響や、加賀藩による寛文10年（1670）から正徳４年（1714）までの大工事による流路の固定によるものである。

今回の調査対象地の中田地区は、昭和29年に成立し昭和41年に高岡市へ編入された所である。昭和29年に成立した新中田町は、それまでの旧中田町と般若野村が合併して成立したもので、西側に旧中田町が東側に般若野村が位置している。この旧中田町は、明治22年の町村制の施行により、江戸時代以来の中田町（中田村）に下麻生新村と上麻生・下麻生両村の各一部が合併して成立したものである。般若野村は、常国村・今泉村・下山田村・滝新村・中野若杉新村（若杉）・小泉新村・島新村・下山田新村・東保新村・今泉新村・滝村・射水郡円池又新村の12箇村が合併して明治22年に成立したものである。

「中田」の始まりについては天武天皇の代との伝承があり、良田が開けたことより中田とされたと言われている。確実な史料では奈良時代の東大寺領荘園関係のものから伺われるものと言える。



第２図　調査対象地区分図（１／10万）

第３図　中田地区位置図（１／５万）

高岡市域は古代では射水郡と砺波郡に含まれる地域である。南部及び南西部が砺波郡に該当する。南部地区の東側に位置する中田地区は砺波郡域であり、ここと行政界で接し北東方向に位置する大門町は射水郡とされている。『和名抄』によれば砺波郡には12の郷があったとされている。これらの現地比定はいくつかの説が出されてはいるが、不明確である。中田地区に関しては最近になって「意悲郷」に当てる説が出されている。

８世紀第２四半期～中葉頃に律令政府による土地政策の変更がなされた。養老７年（723）の三世一身法、天平15年（743）の墾田永年私財法により、墾田所有が法制化され、班田制が変質した。 これによって大土地所有が基礎を得、天平勝宝元年（749）の官大寺への墾田地施入により、 初期荘園が成立するに至った。

東大寺は天平勝宝元年に4000町にのぼる墾田所有枠を確保し、新たな開拓や寄進、没官地の施入、買得に

より、寺田・寺領としての大土地所有を展開した。

この東大寺領の荘園は全体の約5割ほどが北陸道に設定された。越中国においては射水郡に4箇所、砺波郡に4箇所設定され、その時に荘園図が作成され現在に伝わっていることより、その内容が判明している。

砺波郡の東大寺領荘園は、石粟荘、伊加留岐荘、井山荘、杵名蛭荘であり、以前よりその比定地について研究がなされてきている。杵名蛭荘については、井波町の高瀬遺跡が該当すると言う説や高岡市の戸出地区に比定する説等があるが、明確ではない。残りの3荘については、庄川の右岸（東岸）地域に比定する説にほぼ固まってきていると言ってよいものである。高岡市の中田地区から、南側の砺波市庄東地区、さらに南側の庄川町三谷地区にかけて位置していたものとするのである。この3者の位置関係については、荘園図の記載内容により、北から南へ、石粟荘、伊加留岐荘、井山荘と位置付けられている。

当中田地区と関係するのは、「石粟荘」であり、中田地区から砺波市の庄東地区へ比定するのが有力な説となっている。 石粟荘については、天平宝字3年（759）の荘園図「越中国砺波郡石粟村官施入田地図」がある。野地に設定したわけではないので、これ以前から開拓され墾田があった所である。

天平勝宝2年（750） 2月18日、越中国司大伴家持は砺波郡へ墾田地検察に出かけ、 砺波郡主帳多治比部北里の家へ泊った。その時「夜夫奈美能佐刀……」と詠んだ歌があり、この「夜夫奈美能佐刀」は「荊波の里」と解されている。一方石粟荘の荘園図にも「荊波」の名が載っている。この比定地については、高岡市内（福田地区）、砺波市内、西砺波郡福光町内の各地があるが、最近、石粟荘付近に比定する説も出されている。

現在中田地区を東西に貫く道路として、主要地方道富山戸出小矢部線が通っている。東側へは射水丘陵の先端をかすめるように富山市方面へ延び、西側へは庄川を渡り戸出を経て小矢部市方面へと達する。富山市方面から県境の倶利伽羅峠を越え加賀方面へ向かう最短ルートである。近世北陸道の本街道及至脇街道であると共に中世にも同様なルートがあったとされている。院政期末～鎌倉期初期に軍勢が通ったと推定され、天正13年（1585）には豊臣秀吉が中田地区を通り富山城を攻めている。このルートについては古代まで遡るものであるとの説がある。また石粟荘の荘園図にはこの荘園の北側を砺波郡から婦負郡へ通じる道が描かれている。この荘園図の道については、一番北側に設定した場合現行の主要地方道とほぼ同一の位置と考えられ、南側に設定した場合でも中田地区を通っていた可能性が高い。

石粟荘・伊加留岐荘・井山荘の東大寺領古代荘園は10世紀後半～11世紀にかけて荒廃し敗退して行った。この跡地に中世荘園の徳大寺家領般若野荘が成立してくる。般若野荘の初見は文治2年（1186）だが、12世紀前半、大治元年（1126）～4年（1130）の成立が推定されている。

般若野とされている地は、現在の中田地区を含む高岡市の南東部から、砺波市東部、庄川町北部を含む所である。現在は庄川により分断されているが、往時の庄川主流の右岸地区一帯であり、東方の山地からの河川を灌漑用に利用し易い良好な土地であったと言える。

院政期末から鎌倉期初期には、この般若野が戦の舞台となった。これは当地が行政的及び交通上の要所であったことと理解される。

般若野荘は戦国時代まで存続した。一方、「中田」の名が勝興寺系図に見える。文明13年（1481）に、康兼（蓮如上人第4子の蓮誓）が般若野荘中田村に徳成寺を建立と記されている。近世の村落としての加賀藩領の中田村の成立については、慶長10年（1605）に総検地が実施され村定がなされたとされる。さらに慶長20年（1615）に宿走人足伝馬の御印の受領があり宿場町となった。東側の常国村には元和6年（1620）に御旅屋が設置されている。

Ⅱ　遺跡各説

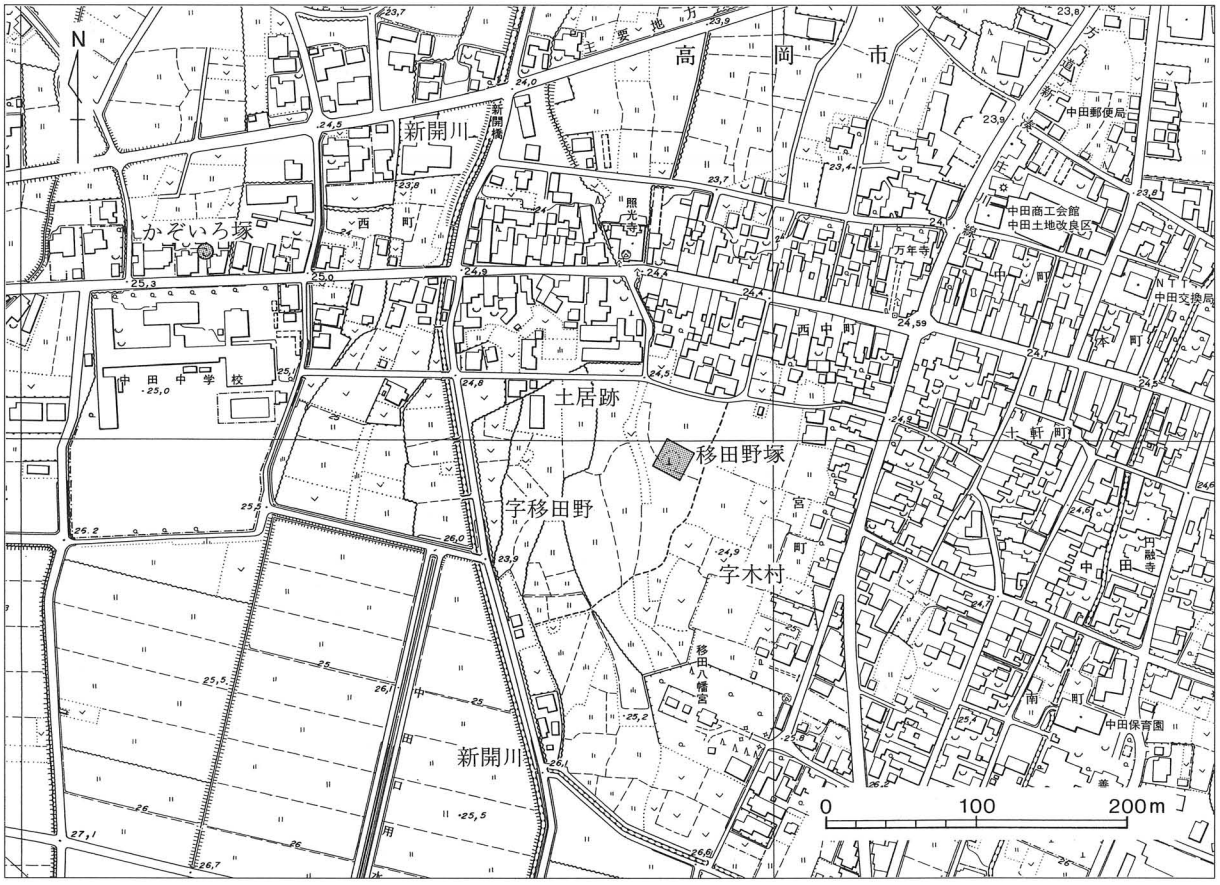
11．かぞいろ塚遺跡

かつて存在していた塚。当初水田の中にありその後宅地の一角にあったが消滅してしまった。中田中学校の旧県道を挟んだ北側に位置していた。径約5.4mで高さ約2.4mで、塚上に「かぞいろ塚」と彫った石碑があった。図版３の写真は平成２年３月に撮影したものである。この塚について『中田町誌』に述べられているので引用しておく。

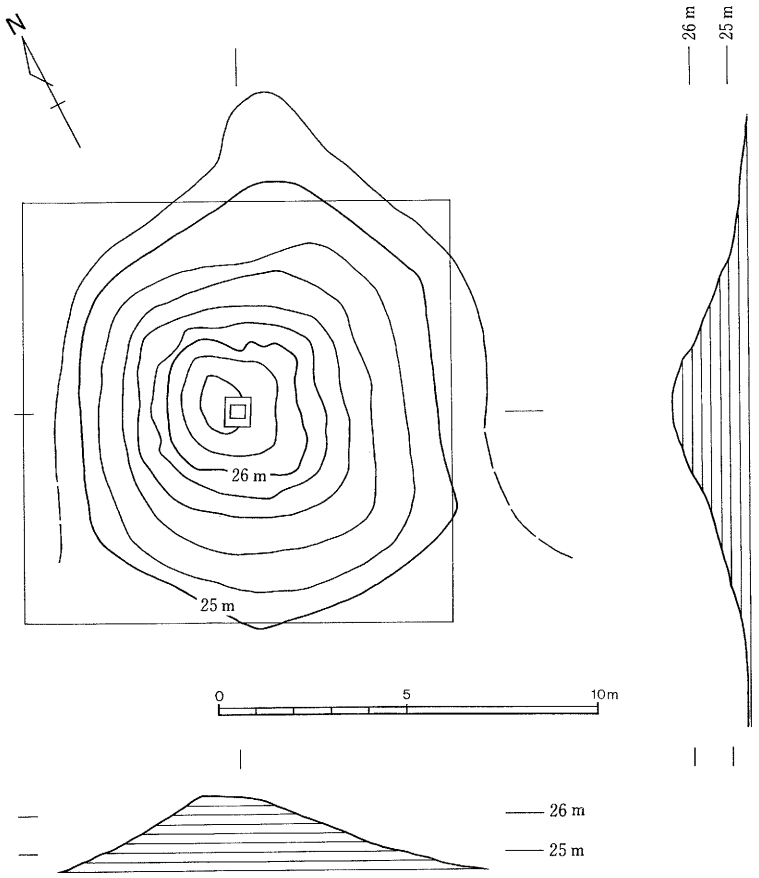
中田中学校前、県道を挟んだ酒井家の中庭に「かぞいろ塚」がある。

この塚は一名を順博石ともいい、元は伊藤方の耕田の中央に位し、昔の中田通が塚の北方を迂回していた。文化十一年甲戌（一八一四）、中田の孝子金岡順博が親の冥福を祈って建てた碑で朝夕拝参して追孝につとめたと伝えている。「かぞいろ」とは父母爺媼のことで祖先とも通解され、つまり親の墓塚の意、順博・竹庵・呑沢はいずれも医師の異名（どんたく＝蘭語、日曜日が転じて休日の意）であるから、順博石の名称から医者であったと推定される。

砂岩でできている石碑は北面しており、背面は長い年月に亘って風雨にさらされ、下段は剥落して発起人などの氏名があったというが、今日では判読できない。



第４図　かぞいろ塚遺跡、移田野塚遺跡位置図（１／5,000）



第５図　移田野塚遺跡地形測量図
（１／200）

12．移田野塚遺跡

近世の塚である。これについては以前より「移田野（いかだの）塚」として遺跡（埋蔵文化財包蔵地）とされてきた。地元では「せんもんやま（泉門山？）」と呼ばれ馬の骨が埋まっているとの言い伝えがある。一方地元の有力者であった吉田家の初代の墓との主張もある。

位置的には現在の中田市街地、近世の中田村の南西側に当たる。加賀藩はこの付近に正保３年（1646）４戸前の御蔵を設置しその後増設し13戸前となった。中田御蔵である。この御蔵所の西側には土居がありさらに西側に新開川が流れ、この川を使って御蔵米を運搬した。その後このあたりは吉田家の土地となり現在に至っている。この一帯は東側が小字木村で西側が小字移田野である。 塚の南側160ｍの地点には移田八幡宮がある。

この移田野、木村一帯で平成元年より土地区画整理事業が実施された。当遺跡の現状保存が難しい状況になったので工事に先立つ発掘調査を平成４年に高岡市教育委員会が実施した。報告書は『移田野塚遺跡調査概報』として刊行した。

当遺跡の概観は土饅頭型の塚の頂部に石の塔が載る形態で、この塔は２段の基壇石（台座）の上に塔本体が載るものであった。塔本体は正面に「南無阿弥陀仏」裏面に「吉田氏」と刻まれていた。各部を組み合わせるためコンクリートが使われており、少なくとも近年の造立ないし補修を窺わせるものであった。石材からは上方台座のみが他の２者と違い古い様相を示すものであった。

地形測量と発掘調査により塚は次のように復元できた。形態は四角錐ないし裁頭四角錐で、底辺は11ｍで高さ２ｍを計る。盛土は付近に存在する礫を主体とするもので、盛り上げ自体は単純なものである。近世陶

器片が出土している。塚の中心部の旧表土・基盤層を掘り下げ土坑状の施設を設けている。この中に炭とこれに混じって少量の骨片が入っていた。骨は鑑定の結果、成人骨の焼骨片と判明した。これらがこの塚の主体と判断した。この施設・骨片のため、またこれに象徴される目的のため塚を構築したと推定された。時期については出土した近世陶器片より、17世紀後半頃から18世紀初頭頃と考えた。

なお、図版4の写真は平成2年3月に撮影したもので、図版5の写真は平成4年10月の発掘調査当時のものである。

13．山下遺跡

当山下（さんか）遺跡は昭和17年に暗渠排水工事による遺物出土によって知られた遺跡である。山下集落は芹谷野段丘の北東側に位置し、東側は和田川の谷部に臨んでいる。南側には和田川浄水場がある。集落の東側は段丘の低位面となっている。当地はかつての射水郡円池又新村であり、その後大字山下となった所である。遺物の散布は集落の南側から南西側の低位面に拡がっている。採集遺物は小破片のため明確ではないが、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古墳時代の可能性のある土師器がある。

14．東保石坂遺跡

縄文時代中期と奈良時代以降鎌倉時代に及ぶ複合遺跡である。遺跡の中心は砺波市側にあるが、高岡市の今泉地内にも範囲が及んでいる。当地は芹谷野段丘崖下であり、北西側には北陸自動車道が走っている。遺跡は行政界を流れるゴタ川沿いに拡がっており、ゴタ川に臨む微高地を中心に立地している。範囲は南北約100m×東西約200mである。

15．常国遺跡

常国集落の北西側に位置する遺跡である。縄文時代中期、古墳時代後期、奈良時代～中世の複合遺跡である。常国住宅団地造成に伴う試掘調査により平成3年10月に発見された。大字常国小字狐塚を中心に拡がっていたので「常国狐塚遺跡」と称したり、団地造成が発見の端緒であり、団地内に相当量の拡がりがあることから「常国住宅団地内遺跡」と称したこともある。このように限定的名称としたのは、常国地内の北西隅部に位置することや常国地内の一部を占めるに過ぎず、常国地内から今後別の遺跡が発見されることを考慮したためである。

団地造成予定地内の試掘調査により南北370m×東西140mの遺跡の拡がりを確認し、さらに団地造成予定地の西側へ拡がるものであることが推測された。本調査は平成4～5年度に実施した。調査面積は平成4年度が約5,500㎡、平成5年度が約3,000㎡の合計約8,500㎡である。 この発掘調査の概要は以下のとおりである。

検出遺構；古墳8基、竪穴住居址（竪穴式建物址）7軒、掘立柱建物址7棟、井戸址11基、柵址数条、土坑多数、溝多数、柱穴（ピット）多数。

出土遺物；土器類は縄文土器・土師器・須恵器・珠洲等で奈良～平安時代の土師器、須恵器が最も多く、次いで珠洲を中心とする中世の土器・陶磁器類が多い。土製品は須恵質の瓦塔片が1点出土している。鉄製品は鉄剣、鉄鏃、刀子、紡錘車等が出土している。古墳から出土したものが中心だが、柱穴から出土したものもある。木製品は皿、箸等で中世の井戸址からの出土である。

時期別の概要1－古墳時代；古墳8基。盛土（封土）が削られて存在しない円墳が8基検出された。周溝と主体部（墓穴）の最下部が残存しているものと周溝のみ残存しているものとがある。遺骸は残っておらず、遺骸を納めたと推定される木棺も残っていなかった。規模は外径で7～20mを計る。第1号墳と第2号墳の主体部と第5号墳の周溝から鉄鏃が出土している。第3号墳は外径20mを計る最大のものである。主体部か

ら鉄剣が出土し周溝から須恵器杯蓋が出土している。この杯蓋は6世紀前半頃のもので、この古墳及びこの古墳群の時期の一端が6世紀前半頃のものと判断している。

時期別の概要2－奈良～平安時代；竪穴住居址（竪穴式建物址）7軒、掘立柱建物址6棟、井戸址1基、溝1条他。奈良時代後半（8世紀後半）を中心とするものと平安時代前半（9～10世紀）を中心とするものに区分される。平安時代後半（11～12世紀）頃のものは少ない。奈良時代後半としたものは掘立柱建物址5棟、井戸址1基等である。 掘立柱建物址ＳＢ01は南北棟で桁行7間（14m）×梁行3間（5.4m）で東側に廂が付く。同じくＳＢ02は東西棟で桁行6間（12.6m）×梁行2間（5.4m）で南側に廂が付く。 井戸址は方形で大型のもの。2段掘りされている。上面形は長方形で南北2.60m×東西3.00mを計る。中段での形は略正方形で一辺1.70mを計る。深さは2.65mである。井戸枠（井戸側）は残っていなかったが、木製の板組みの井戸であった可能性が強い。平安時代前半としたものは竪穴住居址7軒等である。竪穴住居址は浅い竪穴である。焼土の部分があり竈があったものと推定される。

時期別の概要3－中世；掘立柱建物址1棟、井戸址10基他。井戸址はすべて円形の素掘り井戸である。径1～2mで深さ2.8～3.0mを計る。

この遺跡の発掘調査は常国住宅団地造成にかかる平成3～5年度のものと、個人住宅建設にかかり平成7年度に実施したものがある。後者については住宅団地の北東側であり、遺構は検出されず、遺物は土器類の細片が僅かに出土したのみである。

当遺跡の範囲については一応南北480m×東西270mと捉えた。これは遺物の散布状況と平成3年度の試掘調査から判断したものである。

遺跡の東側を鯰川（前川）が北流している。現在は直線的に改修されているが、以前は遺跡付近では東側へ張り出すように曲流していたとのことである。奈良時代以降については、この鯰川の左岸（西岸）の微高地を中心に拡がっていると言える。古墳時代については北東側を中心に古墳が群在している。これに伴う遺物が少ないこともあり、表面採集からは古墳の分布状態の把握が困難である。また奈良時代以降の遺物についても、発掘調査によって得られた遺構・遺物に比べて、表面採集される遺物が少なく、もっと広範囲な遺跡である可能性もある。

16．常国北遺跡

常国地内の北西端部、常国遺跡の約100m北側に位置する。 この遺跡の西側は下麻生地内であり、北側は大門町との行政界となる。浜田川と鯰川とに挟まれた地区を中心に拡がっている。標高約19mを計る水田地帯である。遺跡の範囲は一応南北180m×東西約270mとしたが、さらに拡がる可能性がある。常国遺跡がさらに北側へ拡がっており、この遺跡に含まれるものともできよう。土師器、須恵器、珠洲が採集されている。時期的には、奈良～平安時代を中心に中世に及ぶものである。

17．滝遺跡

芹谷野段丘崖下に位置しこの段丘崖に沿うように北東～南西方向へ拡がっている。 最大幅は約170mで長さは約600mに亘る。 当地は滝地内が大半を占めるが北東側は常国地内に達している。現況は標高23～25mの水田地帯である。縄文土器、土師器、須恵器、珠洲が採集されている。縄文土器は中期中頃のものである。縄文時代中期と奈良時代以降中世に及ぶ複合遺跡と把握した。

Ⅲ 遺　物

採集された遺物は土器類である。これらは、縄文土器・土師器・須恵器・珠洲・越中瀬戸・丸山・唐津・伊万里等である。明確に弥生土器と言えるものは採集されていない。細片がほとんどである。図面４として21点図示した。遺跡（埋蔵文化財包蔵地）とした範囲内から採集された遺物は以下のとおりである。

東保石坂遺跡：105。常国北遺跡：101・108・109・113・119。滝遺跡：102・107。

１．須恵器

杯　101～105。101～103の３点は杯の口縁部である。口径10.7～12.4cmを計る。 101は高台の付かない杯の底部である。底部はヘラ切りである。105は高台付きの杯の底部である。高台は外下方へやや踏ん張る。

杯蓋　106～110。106は杯蓋のつまみ部であり、偏平なものとなっている。107は杯蓋の天井部から口縁部にかけての部分である。天井部の中央と口端部は欠損している。天井部はヘラ削りしている。108～110は杯蓋の口縁部である。 108は天井部から丸みを持ったまま口端部へ移行し短く下方へ折れる。109・110は口端部が外方へやや延びた後、外下方へ短く折れる。

甕　111。甕の口縁部でくの字状に折れるものである。

２．中世土師器

皿　112。土師器の小皿である。口径9.7cmを計る。口端部は幾分つまみ上げたように終わっている。内面と外面口縁部は横ナデしている。灯明皿として使われたものである。

３．珠洲

鉢　113。珠洲の擂鉢である。口縁部は欠損している。オロシ目が付く。底部は静止糸切りである。

４．近世土師器

皿　114。近世土師器の皿で、大型のものである。口径31cmを計る。 口縁部は丸みを持って立ち上がる。底部は欠損している。

５．近世陶器

越中瀬戸、同じく県内産の越中丸山、そして唐津（肥前陶器）である。

越中瀬戸　115～119。越中瀬戸の皿である。

越中丸山　120。丸山の小型の椀である。

唐津　121。唐津の椀である。

Ⅳ 結　　語

中田地区の考古学的知見は少ない。昭和47年発行の『富山県遺跡地図』では、かぞいろ塚、移田野塚、山下遺跡の３遺跡である。平成３年度に常国遺跡が発見され、これより数年前に砺波市の東保石坂遺跡が発見され行政界を超え高岡市側へも拡がっていることが判明したので、平成５年発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』段階では５遺跡となった。今回の分布調査により、常国北遺跡と滝遺跡が加わったので確認された遺跡は７遺跡である。

考古学的知見の少ない中田地区において考古資料のみで歴史を遡ることは難しい。しかし周辺地区の考古資料やこれ以外の歴史資料をはじめとする資料により、その豊かな歴史を知ることは可能と言える。

旧石器時代については、中田地区の北東側の射水丘陵や南東側の砺波市の丘陵部で該期の遺跡があり、これらのグループに含まれると伴に当地区の段丘部における遺跡の存在を否定しきれない。

大門町の串田新遺跡は縄文時代中期初頭～後期初頭と後期後半の集落遺跡であり、特に中期後半の「串田新式」の標識遺跡である。芹谷野段丘の北端部にある標高40～45ｍの独立丘陵上に立地している。常国遺跡からは指呼の間に望むことができる。常国遺跡の東約1.3km、滝遺跡の北東約0.7kmの位置である。大門町の

名　　称	種　　類	時　　代	備　　考
11．かぞいろ塚遺跡	塚	近世	高岡市中田 既知　県遺跡番号202195 消滅
12．移田野塚遺跡	塚	近世	高岡市中田 既知　県遺跡番号202196 平成４年度に発掘
13．山下遺跡	一般包蔵地	古墳～平安	高岡市山下 既知　県遺跡番号202197
14．東保石坂遺跡	一般包蔵地	縄文 奈良～鎌倉	高岡市今泉、砺波市域へも拡がる 既知　県遺跡番号202198
15．常国遺跡	散布地 古墳 集落跡	縄文 古墳 奈良～中世	高岡市常国 既知　県遺跡番号202194 平成３～５・７年度に発掘
16．常国北遺跡	一般包蔵地	奈良～中世	高岡市常国 新規　平成10年度に確認
17．滝遺跡	一般包蔵地	縄文 奈良～中世	高岡市滝、常国 新規　平成10年度に確認

付表　遺跡一覧表

小泉遺跡は縄文時代前期中葉と前期後葉～中期前葉の遺跡である。常国遺跡の北北東約２kmで、標高11～12mの沖積地に立地している。またこの付近の布目沢東遺跡や布目沢遺跡からも縄文土器が出土している。

一方南側の砺波市域では、行政界から約２km南側の芹谷野段丘西縁部に厳照寺遺跡が立地している。縄文時代中期前葉、新崎式期を中心とする遺跡でここの縄文土器は厳照寺Ⅰ～Ⅲ式として県内での標識となっている。砺波市の庄東地区では、この遺跡をはじめ段丘上に縄文時代中期前半頃の遺跡が分布しており、縄文時代中期後半頃には平野部へも展開していく。中田地区周辺にはこのような縄文遺跡が所在している。常国遺跡では縄文時代中期後葉を中心に、縄文時代中期前葉、同じく中期中葉の土器が出土しており、滝遺跡では中期中葉の土器が出土している。これらによって中田地区においても縄文時代中期に平野部に遺跡が立地していることが判明した。縄文時代の遺跡としてはこの２遺跡のみであるが、段丘上及び平野部において僅かだが縄文土器の散布している所があり、該期の遺跡がまだ存在している可能性がある。

当地区及び南側～西側一帯の砺波平野では弥生時代の明確な遺跡は見つかっていない。北側の大門町域では多くの弥生時代の遺跡が確認されている。 行政界の北側約1.7kmに位置する布目沢北遺跡は代表的なもので、弥生時代に関しては、中期～後期の遺構・遺物が見られる。この遺跡をはじめ標高10m前後の平野部にいくつかの弥生時代の遺跡が立地しており、さらに北側の標高７mぐらいの所にも立地している。これらの遺跡は弥生時代中期のものもあるが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて本格的に展開して行く。既述の串田新遺跡は弥生時代末～古墳時代初頭の集落遺跡でもあり、古墳（弥生墳墓）も確認されている。このように弥生時代～古墳時代初頭の遺跡は、串田新遺跡を別とすれば、当地区よりも標高が低い沖積地を中心に展開している。

弥生時代後期の墳墓を含むところの古墳は、当地区の北東方の射水丘陵に多く分布している。また大門町域の平野部からも弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓や古墳が検出されている。射水丘陵では飛鳥時代以降、須恵窯や瓦窯、製鉄関連の工房等が形成され、古代越中国の手工業生産の中心地となって行く。

庄川右岸の砺波郡域＝中田地区・砺波市庄東地区・庄川町三谷地区の平野部・丘陵部においては、古墳をはじめとして弥生時代～飛鳥時代の遺跡が明確ではない。古墳群の分布地域から外れ、弥生時代以降の開発が遅れた地域とされてきた。しかし常国遺跡において古墳時代後期、６世紀代の古墳が検出され、この空白期の様相が一部判明され始めた。

砺波郡の庄川右岸やこの周辺において、東大寺領の４荘園、石栗荘・伊加留岐荘・井山荘・杵名蛭荘が設定されたのは８世紀中葉、749年以降である。 伊加留岐荘は野地占定であり、杵名蛭荘の経緯は不明であるが、石栗荘は没官地施入であり、井山荘は在地豪族の寄進によるものであり、これ以前から開発が進んでいたことを伺わせる。

石栗荘の比定地について最近における代表的なものとして西井龍儀氏と金田章裕氏の説がある。西井説では石栗荘が中田地区にあり、常国遺跡が荘域の北西側に位置することになる。金田説は西井説より南側となるため中田地区の南端部の今泉地内が荘域に含まれることになる。常国遺跡はここより北側約２kmの位置であるが、金田氏は石栗・伊加留岐・井山の３荘の荘所が常国遺跡とされる。

なお石栗荘の北側に砺波より婦負へ行く道が荘園図に記載されている。西井説では現在の主要地方道富山戸出小矢部線に沿って、中田地区を横断することになり、金田説でも中田地区の南端部付近を通ることになる。中田地区の位置的重要性を考慮すれば、この道が砺波郡衙と婦負郡衙とを結ぶ伝路・伝馬路であった可能性もあり得ると思われる。

奈良時代の集落跡や窯業遺跡については、砺波市庄東地区において高沢島Ⅱ～Ⅲ遺跡や栴檀野窯跡群等が

第６図　常国遺跡と石粟荘比定地（１／５万）
A ― 常国遺跡，B ― 石粟荘西井説，C ― 石粟荘金田説

ある。これらの遺跡は８世紀前半はまだ少ないが、８世紀後半に増加する。荘園の設置との関連が注目され、これらと相俟って開発が進んだと思われる。梅檀野窯跡群については８世紀前半に形成され10世紀頃まで続いて行く。最盛期は８世紀後半とされている。

中田地区及び南側一帯の平安時代末～室町時代頃の遺跡については、やはり般若野荘との関連が指摘されている。この時期の遺跡については段丘上ではなく、平野部に所在している。常国遺跡は荘域の北側に位置することになる。中田地区の南端の今泉地内付近には砺波市東保高池遺跡がある。中田地区の中世の明確な遺跡は常国遺跡のみであるが、般若荘域に含まれていることや立地条件より、今後該期の遺跡が発見される可能性がある地区と言える。

参考文献

上野　章他　1990　『布目沢北遺跡』　大門町教育委員会

河合久則他　1965　『砺波市史』　砺波市役所

河合久則他　1990　『砺波市史　資料編１　考古、古代・中世』　砺波市

木下秀夫他　1968　『中田町誌』　中田町誌刊行会

金田　章裕　1985　『条理と村落の歴史地理学研究』　大明堂

金田　章裕　1993　『古代日本の景観』　吉川弘文館

金田　章裕　1993　『微地形と中世村落』　吉川弘文館

金田章裕他　1996　『日本古代荘園図』（金田章裕・石上栄一・鎌田元一・栄原永遠男編）　東京大学出版会

金田　章裕　1998　『古代荘園図と景観』　東京大学出版会

楠瀬　勝編　1989　『日本の前近代と北陸社会』　思文閣出版

坂井誠一他　1974　『角川日本地名大辞典16－富山巻』　角川書店

神保孝造他　1977　『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会

神保孝造他　1978　『富山県砺波市栴壇野遺跡群予備調査概要』　砺波市教育委員会

高瀬重雄他　1994　『日本歴史地名大系第11巻－富山県の地名』　平凡社

高橋修宏他　1982　『小泉遺跡』　大門町教育委員会

田中　道子　1990　『秋元遺跡発掘調査報告書』　砺波市教育委員会

西井　龍儀　1985　「砺波平野進出の足跡」『砺波散村地域研究所研究紀要』第２号　砺波散村地域研究所
（後に「古代砺波平野の開発と遺跡」と改題して『日本海地域史研究』第12輯・1994に再録）

西井龍儀他　1993　『シンポジウム古代荘園遺跡が語るもの』　富山考古学会

橋本　正他　1973　『串田新遺跡発掘調査概報』　富山県教育委員会

藤井　一二　1986　『初期荘園史の研究』　塙書房

藤井　一二　1997　『東大寺開田図の研究』　塙書房

藤田富士夫　1983　『日本の古代遺跡13－富山』　保育社

舟崎　久雄　1973　『砺波市東保高池遺跡発掘調査概報』　砺波市教育委員会

古岡英明他　1991　『たかおか歴史との出会い』　高岡市

山本正敏他　1991　『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)』　大門町教育委員会

山本正敏他　1992　『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)』　大門町教育委員会

米沢　　康　1965　『越中古代史の研究』　越飛文化研究会

米沢　　康　1989　『北陸古代の政治と社会』　法政大学出版局

米田　雄介　1978　『郡司の研究』　法政大学出版局

和田　一郎　1959　『高岡市史－上巻』　青林書院新社

富山県教育委員会　1972　『富山県遺跡地図』

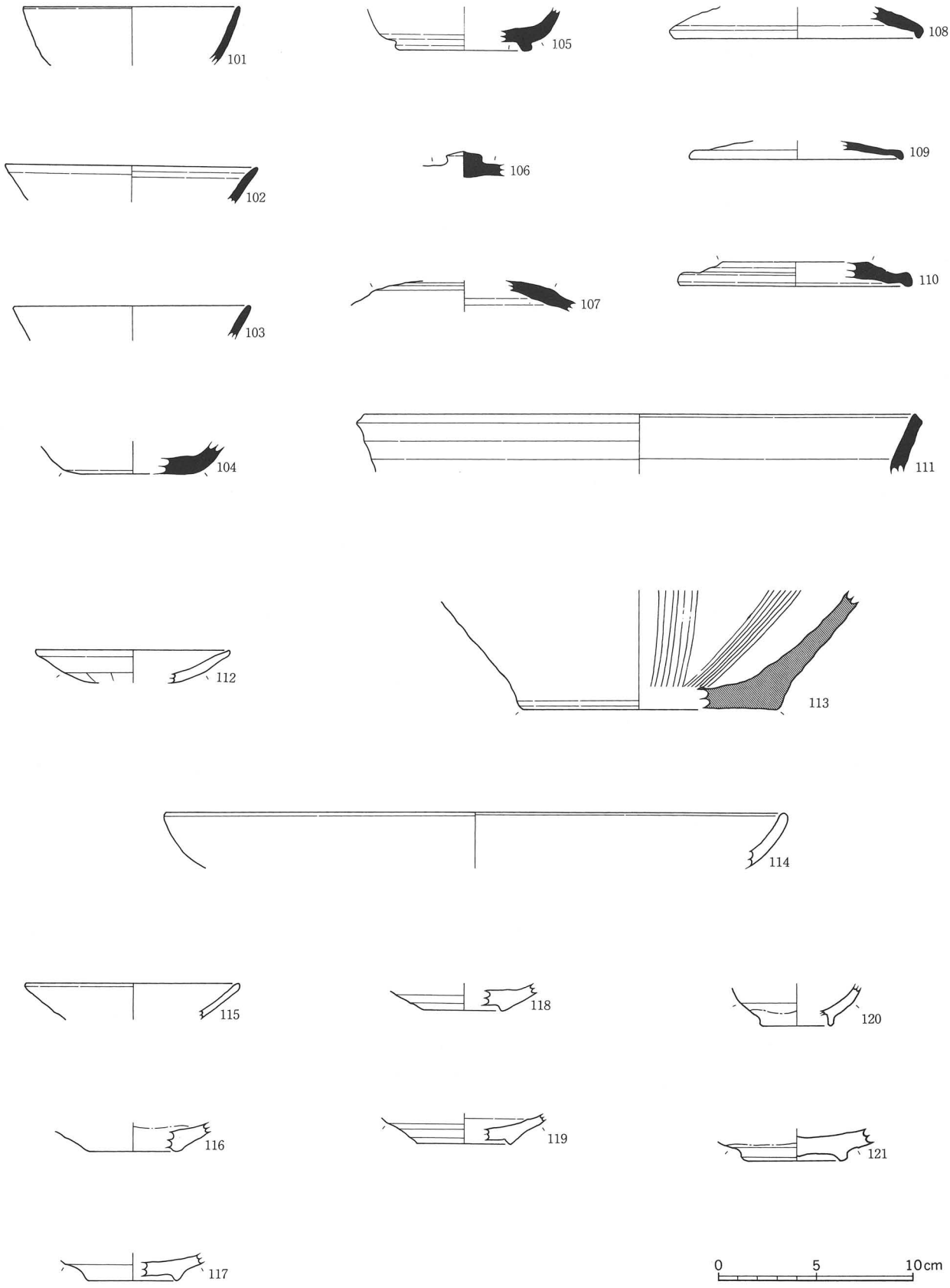
富山県教育委員会　1993　『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』

図面一　遺跡地図　中田地区全体図（一／二万五千）

図面一　遺跡地図　中田地区北側部分（一／一万五千）

図面三　遺跡地図　中田地区南側部分（一／一万五千）

図面四　遺物実測図　土器類（一／三）



須恵器：101～111、中世土師器：112、珠洲：113、近世土師器：114
越中瀬戸：115～119、越中丸山：120、唐津：121

1．中田地区全景（西南西）、手前は庄川の堤防、右上方は芹谷野段丘を経て射水丘陵

2．中田地区全景（北西）、右手前は庄川、上方は芹谷野段丘を経て射水丘陵

1．中田地区中央部全景（南西）、中央左上は常国遺跡、手前側の森は移田八幡宮

2．中田地区東側全景（南西）、中央左寄りは滝遺跡、右側は芹谷野段丘を経て射水丘陵

1．かぞいろ塚遺跡（南）

2．かぞいろ塚遺跡（南）

1．移田野塚遺跡（南東）

2．移田野塚遺跡（東南東）

1．移田野塚遺跡（西）

2．移田野塚遺跡（北）

図版六　遺跡

1．山下遺跡（北西）

2．山下遺跡（南東）

3．山下遺跡（南西）

1．東保石坂遺跡（南西）

2．東保石坂遺跡（南東）

3．東保石坂遺跡（北東）

1．常国遺跡（南東）、上方に庄川が左側から右側へ流れる

2．常国遺跡（南西）、右手前は常国住宅団地

1．常国北遺跡（西）

2．常国北遺跡（北東）

3．常国北遺跡（南）

1．滝遺跡（北）

2．滝遺跡（西）

3．滝遺跡（南南東）

高岡市埋蔵文化財調査概報第42冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報X

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1999年3月31日

印刷所　キクラ印刷株式会社

富山県高岡市柴野内島710-3